オープンカレッジ

ネーミングライツ 幅広い活用を

図書館から起業拠点の「創造館」へ

椙山女学園大学
現代マネジメント学部准教授
水野　英雄

みずの・ひでお　国際経済学、経済政策、経済教育。名古屋大学大学院経済学研究科博士課程後期課程退学。

ネーミングライツ（命名権）は施設の名称に企業や商品の名前をつける権利を売買する制度である。自治体には厳しい財政状況の中で収入を施設の維持管理に充てることができ、企業にとってはCSR（企業の社会的責任）として貢献するよいPRとなり、広く行われている。2024年に名古屋市鶴舞中央図書館のネーミングライツが年額600万円の3年契約で決まったが、市民団体の反対で企業が辞退した。選ばれた企業は、中小企業ではあるが、大正時代に創業された堅実な部品商社・メーカーであり、愛知のものづくりを支えてきた。国内外の地震の被災者への支援や大学の食堂のネーミングライツなどで社会貢献にも積極的である。

古くから大学には「豊田講堂」（名古屋大学）、安田講堂（東京大学）などの企業の寄付で建てられた施設は多い。図書館内には「○○文庫」などの寄付者の名前を冠したコーナーもある。寄付は図書館などの施設運営には欠かせないものであり、クラウドファンディングによる募集も増えている。

図書館のあり方は大きく変化している。フィンランドのヘルシンキに世界的に有名な公立図書館「Ｏｏｄｉ（オーディ）」がある。中央駅すぐ近くで、図書だけでなく3Dプリンターやミシン、楽器やゲームなどもあり、グループワークにも適している。3階のリビング感覚で寛げる空間から、2階の創造的な仕事に適した施設、さらには1階の多くの人々の交流が可能な空間、トイレは男女別でないなど、国内でもオーディのコンセプトを活用した図書館が増えている。

ヘルシンキ公立図書館「Ｏｏｄｉ（オーディ）」（筆者撮影）

本を置くだけの図書館から音楽や映像、インターネットなどの「総合情報館」、さらには起業により新たな産業を作り出す「創造館」へと進化しているのである。

ネットにより簡単に情報が得られるようになったことで図書館の利用者数は年々減少している。利用者のニーズに合わせて変化しなければ、存続すら危ぶまれる。名古屋市は17年に「なごやアクティブ・ライブラリー構想」を定めて改革に取り組んでいる。構想では専門的な多数の資料を所蔵する「アクティブ・ライブラリー」と貸出・返却の拠点となる「スマートライブラリー」、その中間的位置づけの「コミュニティライブラリー」を整備する。28年に星が丘に新たな「アクティブ・ライブラリー」が誕生する。商業施設内で、椙山女学園大学に隣接する。市民、企業、大学、自治体の協力で新たな価値を創造する施設となることが期待される。